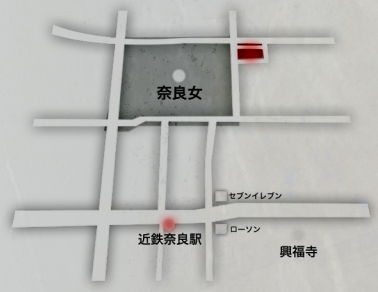
シンポジウム

歴史と異端の神

日時：7月30日（日）14:00〜17:00
会場：奈良カレッジズ交流テラス
（奈良女子大学東側敷地内）
主催：人文学の正午研究会
kiotanaka@fragment-group.com



藤根 郁巳

〈不浄〉をめぐる神々の相剋——時衆国阿上人伝の変奏をとおして——

〈不浄〉、すなわち穢れとは何か。それは我々が大地に存在することを証明するものである。しかし同時にほの暗く、忌まわしささえ感じさせる、生の痕跡である。そして不浄は、中近世を生きる人間にとって、我々以上に痛切なものであった。それゆえに、不浄をめぐって神々は人間に語り、あるいは人間を前に蠢き、葛藤する歴史がうかがえるのである。本報告ではそうした神々と人間の生動を、時衆の高僧国阿上人に焦点をあてて、照らしだす試みである。

津田 哲志

ランケと歴史と神と

歴史家ランケと歴史、そして神、この三者はどう関係しているのだろうか。たしかにランケは歴史家である以前に熱心なプロテスタントであった。しかし、このことはたんに歴史学と個人の信仰という問題なのではない。三者の関係は見かけ以上に密接であり、この関係を通じて別様の「神」が明らかとなる。そこからランケの目指す「歴史」を考える一つの道が開ける。
「歴史」と向き合うための試論。

田中 希生

折口信夫、あるいは歴史における異端の神々との対話について

神は死んだ。ニーチェのこの言葉にかかわらず、彼は神がいるかいないかはどうでもいい、とも言っていました。プロテスタントの牧師を父にもった彼はもとより、歴史哲学者のジャンバッティスタ・ヴィーコにせよ、歴史家のシャルル・ペギーにせよ、彼らは異端の、あるいは異教の神と語らうことで、みずからの精神と語らい、それと同時に歴史を論じたのです。それは日本の民俗学者折口信夫も同じでした。彼らのおこなった異端の神との語らいのなかから、戦後社会が失ったものをふたたび現代に受肉させること、それが本報告の狙いです。

私たちが生きる現代。それは、歴史喪失の時代といえます。すなわち、幼い頃、父や母から語られたような、苦難を乗り越えて生長する、あの懐かしい《人間》の不在。一方で、昨今では、宗教をめぐる諸問題が世間の紙面を踊りました。そして、このことは、いまだに超越的な《神》の存在が私たちを惹きつけながら、しかし私たちの心や社会に不協和音を奏でることを示唆します。したがって本シンポジウムでは、私たちにとって、歴史とは、そして神とは何か。あるいは、歴史と神がいかに交錯するのか。こうした根源的な問いにたいして３つの異なる角度から、やわらかで多彩な光を投げかけます。